

改正三河後風土記卷第拾

目錄

永祿壬戌辰

一 近江國箕作和田山落城付松平勘定

信一勤切之事

一 破木六角父子觀音寺城退去付蒲生

氏郷之事

一 義昭僧徒胡舍付六角代々不化之事

一 義昭上洛之事

一 青龍寺落城付信長紹巴連歌之事

一 拾州抄々軍之事



A210
ナ
1-10A

- 一 義昭將軍宣下信長降由之事
- 一 武田信玄襲奪駿州并今川氏真
走掛川事
- 一 駿府城燒滅并今川將士奔散事
- 一 佐吉築久能城事
- 一 遠州并伊谷刑部新居城并安平由良事
- 一 秋山伯耆守敗走并寺崎南宮榎城事

改正三河後風土記卷第拾

進江圖其化和山落城并松平劫掠

佐一熟切之事

永禄十一年九月十日織田上洛并信長書云乃
 大軍を以て進江に依りて木下尚江を
 放火し其化和山に西陣の所を西面増を
 攻め其化和山と軍令を告し其化和山之元
 氏の家常渡介ト全編系伊藤守一洪江如久
 伊賀守如久和山城を押し其化和山
 其の尉佐盛丹羽部新居の長安清丹
 新八郎木下尚吉部新居右中より千金孫を

兵少保善也の城を押し寄す一見圖を以て
全敵を破る一城を破る一城を破る一城を破る
ら此城の守將は建部源節、秀明
右四郡を重なる回新物六千余の城を
川つは矢地を破る一防城一時刻を
包む城門を固密く守る、子散る、守る
ら建部とんと攻めみける、是程の小城を
攻る、日敵を費し、兵を換る、一治れ
城を押し破る、一重なる、攻る、
一城の守り、一引返さんと
減田殿、佐之宮、其の封を以て、松平、勘定

佐一の陣一佐甚ハさき一は今期卯刻
より午刻、ヤミ、此城を攻め、味方
討死、多、兵のみ多く、一城を破る、
とは、是れ佐一、其の封を以て、
攻め、みたり、徳川殿は、幕府に、
衆を、彼小を以て、大を、控く、事、津の、兵、
勇と、知、之、此城、大、兵、之、陣、を、後、勘定、
徳川殿は、一城を、破る、一佐長
徳川殿は、後陣、より、一徳川、智、兵、の
程を見物す、一徳川、ハ、佐長、に、
阿達は、心安く、思ふ、一、

勤王即返言は、徳の武門の面目
何事、是よ色しき、徳川の家人の
中よ勤王即、や、小將ハ其教よんも
も、徳川殿の位を奪う所、是よ色しき
於ては、此場、急改、是、又討死をば、
二の才、又、安君を極め、即、
徳川殿、弟、小園、我、願、
於ては、是、
勤王即、身、不、
一、
一、
一、

少、
八百、
の、
勇、
今、
彼、
た、
か、
味、
ま、
さ、

後世道の西辱あるを八面一心を一一して
死を一條の皮に此城包むる亦取一
着ると亦此包むるは一人もささぐ
故に一掃一掃と中合一と中合に
士卒何事も皆一同に我れいさく一命を
惜み居る不忠一而原も死辱を許し
ささぐ今我れ八百金人の命を捨け
此城を亦死らん事一瞬の間にささぐ
ささぐ回るるは返さず佐一たは怪し
徳川家の所獲をささぐと押さ大士の
門隙にい一一とささぐ城をのり樹を

破り討た射死事ともせは徳を授け
我者ら一一と先登る榎平勘定部佐一
大士の一番をささぐささぐささぐ六城を
終又一曲端を改すささぐ二の曲端一入
佐一は是な徳をささぐ改す改すささぐ
ささぐをささぐ滅田殿後陣ささぐ形留を
見治い河ささぐ勘定部一の木戸を亦見
たささぐ佐一討た射死者古と牙を遣て
下知ささぐは木下秀右始滅田家の井
中ささぐささぐ二の木戸我押破れさ
城の身將を田もささぐ櫓ささぐささぐ城

か一招右穿を姑く矢地と止む是は
建初原部を治と一城を樹卒有
命を物給く城を以同色治は一との
事成乞ぬ信一甚中藏田殿の御陣一
中置る藏田殿乞を免一のハ建部
去田の毒人は搦のり高り一東光と
と云寺一入く西人忽入道一源初ハ
良仙と改めあるは道學と改め陣名の
姿とせり是云ぬ藏田殿其他の城と諸其
機雖斜形は信一と御陣一なるは今日の
る名えの初か一も運の諸を改らみ

乃る南城と一とを以て改らる事傳
天晴乃武切と云一寧よ汝は小男形
肝よ毛の生たる男う胆と宜い其日有
寺も相乃改繼たる章乃取收を強く
場いたり信一、彼ハ之軍養ひ是と
徳川一家の御教を憚り破誓草を改とせり
此乃復場なり一より相をも改とせりと
略し又和岡山城の守將田中治郷山中
山城と其地の形勢より初より一守
是之を失きり

結、本立角父子親音音城退去

蒲生氏郷之事

破く木六角の系を更に入道其子深志少所は
観音寺の城を存く其化乃城へ軟押参
るは後詰一々故へ一と云く思後
うと其法之人元其甚互筋を切た事ハ
いらせんとい心と苦一め居きう一程
其化も前城一初田山も同退一といも
きけ今は治政の程も形も其醒
居き一又織田家の大軍勝ふ事
観音寺の城は押さず海内へ一は
水須父子大は根拠一決まはたぬる事

城を前矢甲賀の山中へ逃入る

日御各別之年とす編年には石知城
とす今八歳といはる業成後小の向入道父子前矢たると

少一は水須一其く設をきと甲中の

城十八年一夜の事と云云一ぬ織田殿

乃武威被斬のや一日の間に江州城

切形は十三日と観音寺の城へ入路は

甲賀の岸み照障系一人質を執り

信く其田修理元表三は坂井右近

城を奪ひ居る一余せんき切我貴一

爾を罰一其法と少法と其家より江州

日馳城に蒲生右近を更へ順新は後其方

秀郷の後胤より板代の名家なり
近年の勢は承一ける入道は諫我
用さるるを憤り入道と川分を南城に筑居
せしは今も依く木六角の波高をみ如
湖田殿の流系をさるといふく流石弱を陰に
流るる事 南意なるは湖田勢守八二載
世人と同云々 設けたる事 伊勢の
任人神分為人 盛友は蒲生と徳五者
形はは佐長と蒲生と和隆と北隆と
賢秀も逐も甚子雀子代とく 十二歳
なり 一は田代と入道と云 乳母子を流る

人傑よか 一 流系せり 流るは佐長宰相
流るは氏郷と同 一 八 此雀子代の事
なり

按すは原書は佐長親とるをと改らる
一 一 取次利波防戦 一 湖田勢守貞
死人多く城端らに甚子雀子流勇戦
寧も若干討せ 又城を方二反と云
法師大カク 勇戦は佐長大に攻
取らみ浦を 一 取次の家入 一 雲霧
田新雲入道父を誅め時表を傳く
南意と違せんといふ 入道父子城を用

たりと記す是仍此方の安次中にて
諸書より見れば信介是を刑をり家忠
日記織田志紀成績基業より後い本文を
改む

義昭信長朝命 六角代官之事

且利義昭少時直も浪州西に立改事よ
ありけり江州合戦の勝敗きたるに
心えねく思給ひ弟我々陣に祐事を
御使とせしむ感年胡合む侍義弟一
加勢の事を信長さまにハ合旨織田
上総介信長と石具にハ合旨相承成

証哉せんといはれし江州の供へ本六角
取須父子計り知よ意せし侍らる上総介
山見もよとて不日織哉の事申合
部合軍五七万余騎もよとて石見向ら
物もはあ二百とありけり取須父子の
首を削りて其首早速上洛し給へし
義弟も早速馳上り御上洛の佐奉りて
三取織哉の切哉扇さんよは恩賞合軍よ
但さねへりと改不さ侍胡君義弟と
弟よ三取よ内包せし又は三好朝郎
権威を御憚りけんといふ所の事

中寸の爲我三原以八宣く之備侍る
不(逆)口より湖田家の使不被河内吉光治
三攻寺(とあり)河州の山歌とも已よ
逆拂ひ(所)逆筋を用き(とあり)河原向
備(とあり)と中(八)義昭懐(とあり)
大方(とあり)是は九月十(日)光(とあり)佐長は
女(とあり)柏原上(とあり)菩提院(とあり)若津(とあり)せ(とあり)女(とあり)二(とあり)六
糸(とあり)實(とあり)南(とあり)寺(とあり)若津(とあり)女(とあり)口(とあり)は(とあり)守(とあり)心(とあり)若津
女(とあり)若(とあり)志(とあり)那(とあり)勢(とあり)田(とあり)の(とあり)海(とあり)邊(とあり)人(とあり)船(とあり)を(とあり)と
妙(とあり)の(とあり)船(とあり)船(とあり)は(とあり)志(とあり)那(とあり)又(とあり)止(とあり)浦(とあり)船(とあり)の(とあり)用(とあり)を
を(とあり)備(とあり)す(とあり)女(とあり)六(とあり)日(とあり)湖(とあり)水(とあり)を(とあり)海(とあり)二(とあり)井(とあり)寺

極(とあり)樂(とあり)も(とあり)若(とあり)せ(とあり)ら(とあり)ま(とあり)さ(とあり)く(とあり)法(とあり)軍(とあり)八(とあり)大(とあり)津(とあり)
馬(とあり)場(とあり)松(とあり)本(とあり)丸(とあり)寺(とあり)女(とあり)七(とあり)日(とあり)は(とあり)義(とあり)昭(とあり)
湖(とあり)水(とあり)を(とあり)海(とあり)二(とあり)井(とあり)寺(とあり)光(とあり)澤(とあり)院(とあり)若(とあり)津(とあり)若(とあり)津(とあり)
今(とあり)交(とあり)依(とあり)本(とあり)言(とあり)取(とあり)換(とあり)大(とあり)風(とあり)を(とあり)傾(とあり)一(とあり)船(とあり)若(とあり)津(とあり)
城(とあり)堅(とあり)固(とあり)も(とあり)備(とあり)風(とあり)富(とあり)兵(とあり)陣(とあり)の(とあり)女(とあり)七(とあり)日(とあり)
一(とあり)日(とあり)も(とあり)支(とあり)け(とあり)忽(とあり)又(とあり)没(とあり)命(とあり)幸(とあり)八(とあり)代(とあり)
將(とあり)軍(とあり)家(とあり)不(とあり)治(とあり)乃(とあり)乱(とあり)逆(とあり)舉(とあり)動(とあり)た(とあり)天(とあり)討(とあり)の(とあり)
志(とあり)一(とあり)む(とあり)む(とあり)本(とあり)也(とあり)世(とあり)上(とあり)は(とあり)洋(とあり)也(とあり)女(とあり)
其(とあり)如(とあり)ハ(とあり)常(とあり)德(とあり)院(とあり)尚(とあり)將(とあり)軍(とあり)の(とあり)時(とあり)也(とあり)女(とあり)
大(とあり)孫(とあり)女(とあり)高(とあり)頼(とあり)乃(とあり)子(とあり)孫(とあり)心(とあり)少(とあり)粥(とあり)定(とあり)頼(とあり)武(とあり)重(とあり)
茂(とあり)如(とあり)上(とあり)洛(とあり)も(とあり)明(とあり)寺(とあり)其(とあり)上(とあり)將(とあり)軍(とあり)家(とあり)

喉道の所を人達の衆にを侵掠せし

蘇我氏侵掠の事、
蘇我朝の紀にあり

常徳院殿所懐以りて長享

元年九月乙卯の里道所動度より

三年迄改治ししは宣預計雖も甲斐の

山中へ逐逐進出魚元年八月惠林院殿

將軍常徳院殿の所志我徳を是年

乙卯の所動度より時又甲斐の山中へ

逐入りて是をも是れより水心二年六月

惠林院殿周防山にあり大内義興休養

所入洛有る時宣預細川右馬次改質

之好奇重祿中一味一京都へ改より

是を拒由んとしけ侍ちて江州へ

川返り光源院義輝將軍小石川の城郭

掃くありて是れは今所復入運大軍を

川へ通す京都へ入りて光源院殿を逃り

ても是天文十六年の七月時又永禄八年

之好松永礼送を振也一時内へ取扱は

其と臺へは是義昭天源よりありて

志もく所教よりても表はは傾孝し好

由はは之好松永と謀成也と義昭を

失ふんとし今首義昭と諸の道をも遷

留んとす斯代に不忠不臣を振也一時

救代の名一胡又先ひ——も天會の
志——とて可とて刻とて是れ

按て救代は是利敵ハ有力の人を殺み
多難を亡——後又其切立者を擧ぐ
他人を殺し其切立を込て事せとて
代しの家風とせしむ——其四叔を殺し
義昭ハ佐長の切を忌避し是胡倉田
小糸赤と殺し佐長を亡さんとて
救代天子を考ふとて佐代木古角は
攻ら——是は甲斐の山梨(近)救代
首さ——の——山梨(近)歸を以て方古

不易の謀と代々男の居るは佐々
今も甲斐(近)入——時代象——其酒
又其佐長は佐々其四叔を殺し其
長く其家を失へず其佐長は
四叔を因循——改革の時を失ふた
古今少くは名門貴族の令に能く
心細ら——きり其佐長也

義昭上洛之事

江州の佐々木古角退教せ——上は一日も
上洛——三好を誅伐せしむるは軍
攻り——は九月廿八日是利義昭上洛の

新振を以て瀨田軍勢十七段暫く
當くと備へし中をうつ一書八佐久間
有る尉佐盛回大守物秀盛回刑部少輔
同古多を以て勢を以て七百二人書八佐久間
定宗其子理佐有佐宗瀨田一書九佐平
此勢二千二百人三書八中池第刃屋忠廣
同大信亮兼田中相与作一人此勢
二千二百人四書八林佐治有秀就池田勝部
佐輝毛利新助権川平治有瀨田源三
此勢三千人五書八兼田佐理亮勝家之同
又毛利家松平勘定部佐一と加へ

此勢四百二百人六書八木下友吉部秀右
同兼助毛利河内与秀頼瀨田造兵元
此勢二千五百人七書八不破河内与光治同
彦之部瀨田上野介佐久其子氏部補佐
振井右近政尚兼中瀨田豊隆有勢二子
八百人八書八明智十三光秀山田一書
増全三書八頼隆此勢四百二百人九書八
山田光輝与公孝遠正河内中瀨田左馬允
此勢三千二百人十書八丹羽部十書八長秀
此田掃部河内富平与貞久此勢二千
四百人十一書八佐久内秀助成政川虎與兼

鎮古渡田越好子回源八郎村字部
計勢二千三百金人十二番は熱大掛織田
上總介佐長糖部勢一万金人拾三番は
織田十郎は勢は信清回市之物信成回源は
回佐物回源子部計勢二千金人十番は
赤三兵衛不成福系又七番村井氏部は捕
此勢二千百金人拾三番は福系は信成二旗
氏家常港介卜合伊賀守加勢は官次計勢
二千百金人十番八村井丹後守瀧田部は物
賣平十郎加勢三番甲斐越前守大山
越前守名家系女正乳加勢は計勢百十

或百人十七番八織田源十部佐成回之水信重
左毛伊豆守山口廿三番是勢又赤の播磨は信正
茶田一守小島左馬九丹羽越前守是竹村
新田守滝地傳八右田守是藤川三郎は
圓平八郎永井新太郎赤三郎は計勢
二十百金人部合六万二千百金二種是其略
より義昭八細川三郎左衛門者三三金人
茶田と上野中勢大捕信成二百金と
信成と信成を拂うて赤天白日と
足心地と旗旌秋風よひと
京都へ入りし軍勢物の具各侍罷と

糺せり洛中一洛不乃貴賤群集して
其の情と見物するもの街巷せ向くと
元浦を幾所清水寺前古くは清水寺と云ふも當福院と云ふ所
此寺は元祿五年に建立せられたり
信長八東福寺より陣一より天下
二人の將軍ありと云ふなり

香龍寺舊城也 信長銀巴連歿する
信長八岩城を脱物り山崎を物事の城に
在りてありし子連より坂井右近衛より
柴田勝元を城を多勢いと軍將より
六千五百人桂川を截し香龍寺より
象白せりめり此城抑ふる城下の

田舎を放火し經を多く改定所岩城より
是城陥んと云ふ大勢ありか
騎馬武者よりけりて息も敗走り
柴田勝元密坂井右近衛の首を十
余級打ち取りて一東福寺より宝珠を
傳へ信長所感涙流るる又美谷九郎より
命せり洛中一洛不乃貴賤群集して
其の情と見物するもの街巷せ向くと
元浦を幾所清水寺
信長八東福寺より陣一より天下
二人の將軍ありと云ふなり

昌比其外一藝ノ名と曰者ノ者とも我
者ら〜と清水寺東福寺〜と上〜
賀〜と侍其外〜と信巴末廣二本基ノ
のせ〜と信長〜と敏長所境〜と

日本子よ入向〜と日ノ海〜と

と信ら〜と本まは信巴西教ま

一兵信〜と千代不代の扇〜と

と〜と信長謀文所感行〜と此日群集の
諸人〜と信長の事も此の所初為〜と
福場〜と、信巴は珠の極教多場い〜
と〜と
和書は信長と信巴の事
と信巴は信長と信巴の事又此日

不意の事あり〜とは織田と藤本信也と部

と 徳川家の所如松平勘定任一

下部と諸事〜とあ〜と古烏帽子一と身金

争端ありしけ〜と兵衛尾港の軍勢一回

〜と信一、陣は抑交、徳川家の人、

是を見〜とけ〜と力なり〜と尋常〜と致〜と

所見せ〜とや〜と弓矢絶を採〜と幸味

歎と侍其威は遠く放て近身ものハ知

信長刻と少石〜と悟き奴系、根籍〜と

徳川殿より加賀と回士打す侍と云不意

ありた、諸人ともせ〜と信一、陣は向い根籍

少くも者ありんは一と首刻よと兼田
 仿之冒ふは治りし高きは是を少て亦其
 敷く又迹を存し佐長急き佐一せり
 いふ佐一人自其化の城攻前一又今其の
 根藉詰一更此類者其得振来くふと
 再之詰更阿又今は佛園一て今其の
 始末 徳川殿一更細くゆふふとよとて
 形く暇々り佐一は法人又中人せり
 隔ふせり 高徳昆編年誌佐一佐長原系の留る事千御説あり
 城攻の時高徳
 叔聖母九百ふは佐長畿内ノ歌大
 退治す一ととと 義昭を討し惠福寺成

東陣 せむ色熱勢亦万金珍状もも小中も
 満たり佐長は寺戸 寂照院も東陣を
 居らむせんぞ我以て青龍寺の増を固
 甚とすも堂成入らむ一は岩成を脱物
 早速一發も及つは澤人よふりたり
 佐一 岩成とは松州發汗のせんま加
 らぬ

松州刊、軍之事

松州伊丹城に伊丹大智親共三好方よ
 在りし先く義昭の四方一忠志を也一
 今も是は今も義昭所帰洛を懐く九月

廿九日人取をわし武庫郡河内郡を
放火をせしは三好方の軍は大に驚き馳走
河内國版表城には三好三人元の一
三好正勝も改入道約南を城に
三好山城も康長入道岩岩二人八甲
城と逐わし一をを多く所たり島山
次郎言ははあき義昭一忠志を運
けしは言はる城と逐わしは悔恨長
山崎と陣せしは万金珍とまて孫州
沈四城を改らし城之沈四城後と改大別
の者も一烈要防戦せしは言はる

軍人梶川平太夫と云勇士十人
討死し報をば取をわし言はる言は
大軍も言はる言はる言はる言はる
押法共とて言はる言はる言はる
お人言はる言はる言はる言はる
城と入道右近衛監治進色に三好方
隆系言はる言はる言はる言はる
天神馬場の力言はる言はる言はる
三好松永言はる言はる言はる言はる
義宗朝臣は將軍言はる言はる言はる
京都も川流言はる言はる言はる言はる

那ー治ノ以出頭ニシテ揚州富田ノ云
善門寺ニ御座あり之好方ノ人ニ是君ト
宗女ニ在リ又今自ノ隆勳ニシテ是は
茲ニモ所安成成就ノ隆原右京を以テ
トシ細川掃部物直之ニ好方御部 長治
所依トシテ十月朔日河波ノ圍ノ落
トシテ是ノ時ニテ、龍胆ノ種也哉、松ノ以テ月
末ノ月ニシテ、龍胆ノ種也、松ノ以テ月
末ノ月ニシテ、細川右京寺又晴元ノ婿男
六郎 昭元ニ好方トシテ是入道トシテ亦大男
トシテ龍胆ノ種也、是も十月朔日ノ夜中ニ出頭

口圍ノ落シケハ隆原右京を以テ二日朝
鐵水御座布川滝山ノ高嶺を捨テトシ是も
口圍ノ落シケハ隆原右京を以テ二日朝
義昭も佐長も芥川城に入リテ其内ノ
時事我沙汰トシ各團長を絶シテ是
河内金若口城ニ之好方左京寺ニ殘次は
元ノ時 光源院殿を殺セリ時ノ事も
形ノ以テ好方岩ホトハ不細心ニシテ早送
義昭ノ所味方ニシテ松平澤忠之丞
右衛門久通父トシテ人ノ真意ヲ察シ
此新ニシテ入リテ油満一天下第一ノ岩物

吉光の小船九十九隻といふ事入と種
 今井宗久は松源と云ふ名量 紹陽の弟子の
 掛物を奉侍其外吉光内の中我れと
 芥川城へ入り和漢の重宝海女を就
 け侍宴と十餘日滞在せしむる間 築田峰を
 喪坂井宮と云ふ所へ諸國の軍勢礼坊
 一々七民達怒をいとして制札と建り
 遠祀の徳と者要買をいふ其文と云

禁制

- 一 當子と軍勢礼坊振籍と事
- 一 櫻と山林竹木伐採事

一 押買押賣兼追三吏と事

右條に於遠道省八建て被ら岩嶺也之
 仍中辨

永禄十年十月二日

新々吉光内政勢以て而 誓ひ第六
 信長義昭と牙後 一と並部 一 備津
 七と一 侍 兼禮礼と芥川と云ふ事 是れは吉光の後継者
 御の要説なりと云ふ事 御の要説なりと云ふ事

義昭將軍 宣下付 信長 備前守

十月十日 是利義昭は松州芥川城より
 歸洛一途 是上徳介信長は五万金給と

川具一佐奉せしむ先六條本國さふ入
くまを斬く細川右京大夫徳の山宅と
候所可と〜移ら〜め〜あ〜せ此年
三献乃所祝佐長より太刀馬献せし所
所酌より所益無所細沙所せし所佐長
東山清水寺の給願、退家せし所月十八日
翌利徳の日記 歳昭徳の位下り叙せし所同日
急減た中一將より計せし所征夷大將軍
室下より禁色吊殿と免する所徳因
りり〜しり大形、佐長今自汗徳と一献
追教一、且利家再興の大勲と賞せし所

左多本營地任せし〜し〜の事〜
倣哉の刃鐵の三宿忠と〜固辞
せし〜
廿二將軍所余内池田筑後守贈政母丹
兵衛親興道徳、徳忠よと奉納す女口日
御年、候所可と一將軍宣下、所祝徳の所祝
以、今及於貴の年、御免と免さ、佐長
太刀馬進上せし、所祝徳弓八幡祝也、佐長
是を御く、所祝十二番た〜、佐長
〜と干戈い〜止、所祝徳の所祝、八法、
武士早く暇給の所〜と、佐長中〜

小鼓と定むる所波初鼓の所弱、細川
典政者質はる所つゝ是時久我大納言
晴通は細川之部大納言存和四伊勢守
惟政上意を借、佐長今直の大切古今
採祥並を以て副將軍所も管願職
なりとも其平望抄中佐有ふ所、一と云
者是は是も國稱せしも一は人皆是を
感一き、相照然る所、觀世更、回小次郎
大鼓大鼓二物小鼓觀世產草の苗、其余某
大鼓觀世亦次郎、此時二鼓の所弱大鼓
伊勢守晴忠之使又上意を借、佐長所軍

百々、將軍所弱、一は所登下さき意、其
所緩者、我揚、二番、一は大鼓、二番、長物
小鼓、幸部次郎、二番、一は色式部、其
二番、室敷、此時佐長、小鼓、一は、
一は、是又、圓、稱、せ、一は、
大鼓、大鼓、小鼓、觀世、產草、の、苗、伊勢、守、
二番、長物、所、能、之、一、座、の、後、也、
一は、一は、田、樂、挂、よ、初、道、佐、長、
一は、一は、規、式、所、
貴、族、目、を、
皆、收、揚、り、稱、下、外、一、又、由、
諸、人、の、類、を

以之是み國創を停止せしむべきは
一沙汰せしむる信長瑞國の暇中とて是
一は不足して逆徒退治に軍之助に與我
所感の悔之を以て所内書を傳ふ其一二
右に在るは書かす是一一は是は辞退せし
其不之は

今自中々逆徒亦不廢日不移時令
退治之奈我勇天下第一也 尚敢
無與之 大忠而之 亦由家之安治
編輯入之 亦之代更 於最者惟政
之

永禄二年十月廿日

判

織田澤吉忠殿

又一通は

今自依大忠彼相川西筋共々之文
却切之方謹殿也

永禄二年十月廿日

判

織田澤吉忠殿

信長大目と題目と施すは事又帳場り共旨
言我初々廿八日濃州改陣一澤津一以
法軍勢もも諸々賞祿を施す一唯是れ
ら之是より是松平勘定一信一は之別是

歸り善作との我のす田多細中上
つは 神者も勅命部、我切を大に所感
ありと云 水戸記

按すこの織田敵今も義昭將軍と
盟誓戴して是利部恢復の切を云ふは
始江州の依り木父子を逃拂ひ義昭と
依りて上洛さうく大切を云ふは
系書には依り木の嫡流は逃れず義
と云者もそ佐長とお汁り佐余の
大切を云ふは 其忠人 徳田目賀多
之上る鳴形と云者の姓名をも教く

書載たり今依り木系書と云ふは
云人は文より形一太田和泉守牛一書と
始此時の事記たる法書と云ふは義
事ハ文より形記事之令く此者偽造と
是況也今悉く刑を此後も義永并
之も義卿と云者の事を教へんは
可は皆妄説也是は昔も刑除くは我
撰者考と云へんは(きこ)

武田信玄襲奪駿州今川氏真
走廻川

義昭將軍 歸洛也

漸く群衆乃やくぢきとも法皇は承慶記
一て一日行付も群衆乃やく其申一も
甲州は御田佐玄祖後には長尾徳信
お州は小條氏政強州は今川昭と申
險要の地を割據一各西境を多し
干戈更は止時昭一今川氏志昏愚弱
としとも父頼元之武威残り徳代
被官御切の年多々は強盜の害を
失り以御田佐は父の徳虎を以ち一
家園を奪一程の無道人形は父子の
大偏成す一知れは御一男姪の情成

いって年んや甥氏志、家玉をも侵掠せん
年頃謀と四一も父佐虎後府我
逐電一京都一御田掛川の湯籠もよ
内也一今川氏志昏弱より一善代
古虎の輩然を合心と抱者巧りと告
多きは佐玄大に懐ひ氏真の元は濃名
薩奥も葛山偏中一も相此志立勝た更ぢと云
随一の侍大將也一賄賂を送り父と厚に
懐ひしは能は利を求然と耽る中一
甲州一内也ももの多多巧り一其の後
初麻地傳書を後州一使一氏真方

中送り々々は六の 徳川は父康忠、
何れも今川殿の幕ありと云へ代々恩義を
重なり一いつ一、大恩成り忘る尾州の
伝はる原もそのみ形は今川殿原の
場、此彼不改取く今は遠州へも我
あさんとす形形留之其勇威よ遠を今我
重恩の被官と云 徳川は降一氣す
その少くは只今乃やく也、んは遠州を
徳川は改取、せん事、眼前形りす、は
とく、尚、今川殿の弓矢我以て
徳川は款せ、せん事、覚来れ、一、一

た、遠州を 徳川はあ、は、化家の
不願とせ、せん、は、使、伝、を、を、
揚、一、物、は、伝、を、遠、州、を、も、入、出、て
不、日、大、軍、成、起、一、之、州、を、改、取、く、今、川
殿、の、怨、を、報、は、一、と、形、氏、志、也、一
大、は、情、り、使、者、傳、を、我、取、一、伝、を、州
可、里、の、り、文、又、心、故、ら、を、其、才、奸、智、貪、慾
一、物、氏、志、之、不、願、を、奪、ん、く、為、巧、云、也
以、く、遠、く、事、親、戚、の、道、又、皆、く、遠、州、は
徳、川、は、遠、く、事、親、戚、の、道、又、皆、く、遠、州、は
形、り、伝、を、奸、計、之、論、れ、一、汝、等、は、け、旨

能く入道より傳へりし返答一早く
傳ふを此道に依て時返答を以て大に
怒り氏真乳真の小児何れを其の妻と
を感ずるは 徳川と和睦一後を以て
薩府を改むんとす 斯くも小縣新米
昂米を是時より使へり 今より徳川
永く好戦也一 大井川と城とを州
徳川殿所より徳川殿より切取られ
徳州は我より徳川を治めり
中道 神君切之史所回意の所返答
可なり 予喜しは任在薩府と雖い 徳川神君の治去方て
所返す此の徳川殿よりとて徳川治米大徳川善業よりて

徳川永禄十一年十一月六日 佐吉二万五千金を
川具一甲府戎古軍一 下中道を經り
由井八幡坂をたふらん 長坂を越
宇都谷と云ふ一 日敷七又押分り 松中
陣と云ふ佐吉軍の内也一 今川方の
徳川一 赤松物と云ふ一 恩賞八甲の佐
吉一 中道佐吉志此軍首も知す
佐吉古軍首と云ふ一 更には白く 流散
す人一人 數を傳ふ也 陣 庵原 長原を
為軍回安藤忠流二千金珍しく 廣徳
首より河へ陣を西二陣 島津忠重長宗

小倉内藤物並次七千余騎八幡平に陣す
惣大将今川氏真は二万六千余騎にて
清見より備きり今川家一發四好宿禰を以
波是二十一以爲て其勢三方に余股を
合秋の勇士とも今我大事と號の星を
耀一具是の池と連の雲霞の如く列是六
今川武田の雄雄と交す大合戦すとい
いぬべき事形んと歎も此方も雲煙を
飲今日を最期と思ふ也。佐吉方は
旗のひんあ付と甚恨護陣を備きり
今川方胡比奈と申す其盛は早に陣を

拂う様有(迹偏)是と其く灘名護軍を
視隆甚子中將大幡氏則二浦共一發之
着山浦中一也氏佐英武田隆秀を佐虎の
駿州より渡たると津平佐渡市城始として
萬(佐吉)内也也。佐大将二十一人の軍
回く洋渡せりハ氏志乃園弱くもハ世も
駿遠の兩國永く身更切(下)は終に湖西
徳川 あり家のわよ切丸うもよりと其く
佐吉軍望の如く佐吉は其切を以て
我、母貴、郡邑好多し人、是、十、
其名を失くし富貴成増(此妙計略也)

町邊の洋波一変一各強府へ入る
較代恩顧の老臣已に別のかく町邊は
茶後又遠官那く益居たる法軍勢熱
大將氏志をば顧もせし志も一の言
我もくと途歸り道邊又人びとも入へ
さうありし洋波不た馬を曰書る海と
少くうりく入る後洋波は村立く
退くくと入るはこはは河一はる事
八幡堂に扣き侍地方はさくへたる事
兼事とし使をせし其使はく就歸り
此道方も河一は方の勢は一人と

入へはいと云庵系少く切はけ勢計り
よて武田と合戦計りふは一先強府へ
川返一重く軍波を定め合戦す一と
大將氏志をば顧もせし志も一の言
氏志其後軍波をへ一とく其一人の
老臣をとり集る如各別心成企一はる也
但一武田勢は馬もく一とく其一人の
中其者もはく軍波をへ一とく其一人の
其中心もはく軍波をへ一とく其一人の
胡比奈と出交軍波の席へお座もせし
料理の言の長がは肯と突り居眠り

一して居たりは神慮多し小倉内親物未
此後と見は思成は思ひ三束才更守心あり
りと刃及びしと氏志へ若狭民真まふらへも
沈黙るやと守小侍あ人若狭は三束才
る。三束の劉士親父の名卷人は終り
牙々今自武田の種の色をも刃はして
一番は迹傳る是一つ次は武田の軍勢
にや尚圍へ入は其より多し條軍旗の
席へも若狭城圍んで危睡を叶う条
不審形も遊すいさ由一人の侍大將
垂く佐支内也せりと兄へく軍と

親也小指子も然く款を必と二幕と
見へは三束才一人謀殺りは誠意是も
見懲せん」と傳は氏志と憎心して
日根時傳才も兼内親物、嫡子小倉出物
あ人も今一三束才は送玄の形勢
なりは謀又討果はし若狭も然らん
よは幸尔の騷擾をふはしとしかを加ふ
あ人も是く如く料理の司は能く望睡し
たる朝比奈、例へ三束はとも朝比奈更よ
用心を執傳も是へ日根時小倉と指招
朝比奈送玄あふは我もあ人の形勢を

凡そくわは周心屯(き妙々さう)其
の程も甘(物)は却比奈(道)心は琳(侍
つと云)少若(す)て我も在能く(存)在(る)六(平)尔の
振(来)す(ふ)以(と)お夜(一)氏(志)一(そ)乃
の程(を)告(たり)其(方)は(其)本(来)は私(に)を
之(く)意(を)得(り)才(令)七(部)は(向)し我(を)只
例(く)店(は)と(道)を(得)たり(其)前(は)日(根)地
御(中)は(小)倉(與)助(あ)一(我)父(の)例(は)
之(を)暫(停)之(を)其(神)子(事)の(者)也(一)
一(は)必(定)之(君)の(命)を(考)り(其)盛(形)留(と
何(を)考)若(怪)愛(御)も(有)り(は)討(果)さ(ん

た(其)乾(之)並(冬)時(り)其(盛)是(我)指(象)す(如
こ(も)此(方)より(周)心(の)体(を)何(ふ)さ(は)
乃(の)災(難)留(る)一(以(と)心(漸)つ(さ)し(知)ら(ぬ
柳(一)一(そ)を(眠(一)居(さ)る(を)乃(て)更(一)
不(属)の(體)各(一)之(を)た(今)は(流)津(津
吾(が)孔(絶)進(一)一(て)以(ん)事(甚)老(一)
我(其)了(此)如(と)立(退)一(其)方(我)亦(人)也(と
蓋(也)何(方)一(前)の)一(一)今(其)本(来)
其(夜)逐(電)せり(氏)志(此)事(一)愛(も)知(解)其
重(く)軍(波)也(一)一(一)富(元)在(我)石(馬)亦
其(盛)は(早)逐(電)せ(一)一(少)一(は)其(八)氏(志

以ききもきて危角の汝活も及ぶ
地も女一人の宿老先已く、歎く内を新羅を
逐きみぬ武田へそ経ひるる疾盛、才の
令七部は兄、人質監禁し、逐きし、
氏志、少く大に怒り、もかして追之愈
すせしは令七部ハ死逐し、多道と人質は
新羅し、く、専ら氏真、法人戀のり、おと
波人質乃首刎たり、を移す武田の先陣、
山縣、部多、東昌系馬場、実徳、氏勝、小山、田
右、忠、尉、高、茂、小幡、上、信、介、佐、兵、衛、志、田、源、兼、
忠、平、田、益、伸、少、捕、達、連、内、氣、修、理、亮、昌、量

等、二千五百人、金、崎、江、尻、へ、こ、こ、宇、和、系、大坂城
上、高、地
すして、宗、東、駿、府、の、町、人、百、餘、先、こ、ま、八、何、百、
事、や、と、し、と、を、わ、と、強、動、し、質、姓、叛、母、を
東、西、へ、持、還、ひ、或、は、切、子、を、脊、負、充、た、る
父、母、の、を、我、川、く、南、水、へ、逐、逐、し、増、中、の
女、童、部、以、り、く、逐、き、り、波、形、し、武、士、も
喜、多、ま、持、以、り、ひ、逐、支、交、計、し、て、軍、城
必、置、者、は、胆、し、大、將、氏、志、も、追、留、の、者、先、の
強、く、を、見、取、起、き、居、た、る、と、う、り、ぢ、り、か、し、時
下、へ、二、浦、裏、裏、依、り、た、く、し、く、就、取、り、も、の、新
是、の、諸、事、も、是、へ、奴、面、色、去、の、去、り、やく、や、て

中横若は末世の五福とも知らず一粟も
新く海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも
等しく治るゝ海を治るゝ母人の運命とも

智恵方顔より多事なれば又も之浦の中
可なり皆のぬ氏志は是れ心と心と道徳
六十金持石具一廿一娘別一娘府を
立ぬく砥城の山志一娘別たり
作史物語の
或は娘府の
塘と海にありて
より走かす道も知らずは彼は是れ浦の
たると情も知らぬは娘は彼より道徳
折倒抑ゆる衣履を剥取るも持
たぬは存九志謀なり一娘人きき
泣悲ハ其後其の絶たるも有り目も
らるるは存九志謀の西花浦の城なり

小糸肥前守徳重遠州豊川ノ城ニ據ルニ
備力ニ奉張茂枝ノ城ニ長谷川常高
一様女一人傳書ニ此城に常高ノ子あり是等ハ遠石
根代ノ海軍を思ハ令其ノ心を歌一
々向、小糸法実使を之ニ豊川ノ城ニ送リ
け、是ハ世忠信を知向古河今暇業ニ覺
たり今川家根代恩を興、勲をけけ
將士を賞しあ、是タ、甲斐形ノ藩代ノ
充格とも恩を立、是歳ニ宵に此大旨ノ
陳辭、内也治系一、之君を追、
五郡を奪人と、人面獸心、海軍ニ

是ハ此城ノ實、あつては義をやり、是を
愛せ、此位ニ、清矣、一、爾、附、けて、君、恩、又、
報、せん、との、志、あり、と、け、け、け、相、比、た、
是、を、や、り、と、報、さ、り、は、義、義、の、心、志、
返、り、も、感、入、り、は、去、り、今、城、方、ノ、志、
新、教、也、此、少、勢、を、以、て、武、田、大、軍、と
交、戦、し、討、死、せん、る、發、は、潔、一、と
い、へ、も、謀、物、也、は、此、と、せ、氏、氏、と、
未、存、命、也、安、一、身、の、名、を、惜、し、討、死、
せん、と、論、評、也、似、たり、幸、柳、川、ノ、城、は、
要、害、深、遠、と、云、根、木、葉、も、之、ハ、奉、張、

不為るは氏志我為城（近江守卷）
守邊形を以て敵軍方の云を以て曰は
烈愛攻るとも容易に城を破るべし
其の（）は山原の少宗氏康父子も
捨もあつて備一定く後法せし時
其時侯君と懐儀の運開る（）
死は易く生は難しと申は一旦の
死守を忍びしを秘の秘を言くこと
勇士の巻と付中（）必死志を
ふいと心中に秘すは（）
其後破城の意（）氏志を達

越川城に軍勢七千人谷津石のや
志を一致し約束し（）
大渡形（）春能（）比端（）
又（）

駿府城焼滅今川將士落著幸

今川氏志を二の竊居（）
併い破城乃山原（）
春能使（）氏志を遠州（）
近入（）
右馬坊氏志（）

小縣二部系は後府を占む其力之強は
沖一たりい、形は嗚呼の者其は業や
翌日後府の境立は一首の相牙を大札と
書く言たりあり

甲斐と形幸と大傍心の家藏を

徳と藩心の錫例一見よ

佐玄と氏吉は男婚の中野はたとひ
敵援する事はなすとも佐玄は謀を巧
し。氏吉の家人女を貸たり利源を以て
漢き終に國郡を奪取し我情のぬ者
形幸は形幸の藩心せし如し。佐玄武門

在る公の如く、比叡山州の徳院は婿婦と
大傍心増綱は任し今又甲斐と頼しは
駿州と奪錫氏真の頼を失り、其
法人其を道と謝り情も理と知る事たり
是のみ形幸は佐玄の道と云は父佐康を
治家し家國我押願し衆形幸は嫡子
太郎義佐を殺害し沈没刑部左衛門頼重と
和睦し頼重を甲州に招きしは
殺し其の田部を奪ひ其上頼重の女を
妾し。此後、後頼を没し、侍暴悪の
不評、形幸は其の罪、今川家の重宝

京極黄門室御馬蹟の古今集我
つりて遊み思ふに中一の賢者と云集て
焚教を頼む物の敷なりて充善妙珠
古今より偏照く軍法我御孫呉の彷彿
たりといふも子孫禁品是來れ——と
思ふぬ者は形なりたり又今川家當代
思願の老后とも利福の爲は誘き大衆を
降く其志我奪はき此中多きこと
中にも善山徳中へは慈目内泊の心く
弦州と下り為さしと懸念し依去此を
より汝はいふ女忠臣のありては保預我

中おひそ板代思義と書りたるに君と
捨く叛逆とと大切と思ふも如君を
知ふは禽獸も弦州を奪ふせん程なりは
甥氏志(こそは)海を(多きこと)大に
冷井——罵多善山大は然悔といふも
論方れく年を経く後少奈氏康(内也)
氏康の多し——依去戦亡——然と頼を
計畧を回——多し其る)敵我——生捕
らるは依去証訪——多し其る)けらるは多し
濃名陸奥等は絶れく元徳の病をうけて
病死——其子中勢左衛門依去の心。たふ

甲州を治すも小田原(近江)より小糸
氏康も其不忠を悟り援助せずは
終に氏康(入道)期比奈之出を八智の宮
孫州より一、武田勝頼滅亡の後

徳川家の謀と書たり、其大野小野を
信玄(内包せ)一、あの信玄稀矣せは或ハ
謀せしむ或は滅死一或は氏康は遠征に
不忠す道(天守)道(是)さることあり
一(は)

信玄兼之能城家

武田信玄孫府を燒拂ハせ其父は久能

在陣せ一、は今川家と合せ一將士尤

陣人より出く人質を執する者甲、夜く

終り終一信玄無謀の横心と云ふ要書

據一穴山陣守信若入道梅吉と此可又

云く、ちふ一む無謀は續たる山下と云北

梅吉、不傾形は方俊の為到定一形

梅吉の名は信玄と信今、
秀吉の弟武田系より家今川の家士は慶永

海軍とく一少野の者も一、梅吉乃

言名比野形も一劉乃者孫文山本勅物入道

道免、第一乃中子野一信玄海軍出陣

百部一少野を以て大野と川橋河野

安き地形ありと尋ふに河を中よりは
此久能山と云は後山乃尾長く川を
源山より流き三方は岩石高く聳る
谷深く其上用水乏しく其中心一乃
細道あり羊腸坂踏へ一箇と傳ふ秦の
函谷蜀乃取圍も是よりはと一と云ふ実又
一丈怒まは三軍の士も押へ難く
能くは屯要害の名地なり此山は城を
築きて玄糧多く蓄むと十人の勇士心城
合せり汝地をを造りては日本六拾州の
要軍一勢強らば押へ攻めんとたやと

新地をへてはと云ふ山本勅物に
して尚且まはし一討治いしと云ふは
大に懐いさへは不見と汝地一城を築ん
て汝地系汝のい土木の切也
云々
常雨甚き丹波又無方路騎兵汝地合言
七拾余人家を築き守りては
甲斐一隊陣せり又 神君云々
同母の所乃松平源一郎麻後と酒井
長兼村忠次、女子とては八川一
出に直治いしと云ふ其家人

三浦無一又欲之在たり物と今も其後
没落より無一も信玄も誰余一も八
何より勤切とせんと思ひ氏志の事
願はざる人質を付し甲府へ連行しは
信玄大に悦み此人質を我方に留置もの
昭せば 澁川尉も後々も我未、幕下
居せらるんは必定なりと云 其人質を
更北甲州より 豊人者をよ中目せ渡
させたり

遠州井伊各刑部前城台 桑平甲

三事

今年三月武田信玄は駿州を攻入る
す志し 少くも 如 神君は在州也
経畧し 治んとして 号城所出馬
攻り 井伊谷城を攻んと 管領新部
定盈英其家臣今泉部を來延彼小室
者と命せし侍抄此井伊谷城と云今月
被官井伊信隆も 真盛、代々の居城之
し、 忠實は 永徳之輩 今月 歳元
討死の時回く討死し 後一強肥後
直親遺跡と徳此城とありし、 是も
被官小幡延馬、 渡りし、 以、 取、 討死

幼子万代は三州の方へ漂泊せり
神君此月初日大井川の邊に所陣を
此方の下、其後定立し糸陣とて此後
惡害の地を留たす陣とて是は力改むせん
七代空く月日を貴一士卒も多し孫
一其一後昔沼津市を去り忠久、其後
石見より所用於本之部を又主附一寺重頼
此之人井田谷の豪傑之此之人は、其後
陣一此方は孫き治く此城戰つて
伊より入る一と申す 神君其の所
此之とて井田谷とて所馬とて道なき處

追放於本之人の所書と下さる不願の
地を其の所書と云

今有る三人の此是井田谷の所書と云
て其の所書と云 此は其の所書と云
幼子分之事、永言遠道為不入此物
早若自甲州彼知分也其也
中此より進退、其也其也其也
其也其外、其不及、其也其也其也
其也其外、其不及、其也其也其也
其也其外、其不及、其也其也其也
白山其也其也其也 神祇にて其也
少得者也仍也其也

永禄十一年三月十日 神澤出判

菅沼宗茂

直教石見守

治末新集

此所書は今も直教の遺書なり 井伊直教の遺書

菅沼宗茂の遺書 菅沼宗茂の遺書なり 菅沼宗茂の遺書

菅沼宗茂の遺書なり 菅沼宗茂の遺書

菅沼宗茂の遺書なり 菅沼宗茂の遺書

菅沼宗茂の遺書なり 菅沼宗茂の遺書

菅沼宗茂の遺書なり 菅沼宗茂の遺書

井伊直教の遺書なり 井伊直教の遺書

武切人の遺書なり 武切人の遺書

定盈は此之と案内 定盈は此之と案内

井伊谷城を以て息を 井伊谷城を以て息を

四月三日庵系を 四月三日庵系を

改より 改より

其家人菅沼又 其家人菅沼又

令指色濃戸川 令指色濃戸川

妙恩者 妙恩者

所名陣 所名陣

去来 阪尾豊前守の赤き一後其處
江馬安藝江馬加賀西へ

徳川家へ降参し其地を居たり

其後今川氏志大に怒り大將を以て
別處其地を攻め其は江馬西人治我

つら又今川へ降参し其地を居たり

神君遠州へ所出馬を以て其地を居たり

加賀守へ妙恩寺の御降へ使を以て

其地を居たり氏志昏愚に銀金源に古

阪尾豊前守の御討参し後深疑味に

火急に苗城を攻め其は冷方れ氏志

降参し一胡の危難を避る安んじ氏志

降参し其心は誰に所寛守の御討

参り其は水く其二の忠告を以て

中と向 神君元より寛仁に海にせりハ

加賀、形知を許させ降参り安

是を以て加賀一人として 徳川家へ降参

我を賣し之を以て大に怒り恨まされ

加賀を招き刺殺たり加賀、神君

小神君の早速に安藝の宅へ左馬安藝を

討果し其首を以て 神君の御降

就余一書の御降を以

神 若此時と也 安房村院寺山麓
 あり、此道をも少あり 由は瀨松郷と
 なるせうい小陣田を歩、切と廣原一
 少いより先と 徳川也、津、しぬせー
 之時、部は安宗能、一發之能、法以安宗益
 回八重宗、洞、洋、安宗、故、回、宋、女、字、尚、不
 之、子 徳川也、少、陣、順、一、今、之、八、重、平
 監物、貞、勝、長、子、九、八、部、自、能、父、子、也、宋、方
 原、一、重、平、は、遠、之、乃、今、川、方、我、大、寄
 徑、い、陣、順、せ、一、め、たり 此、重、平、は、中、能、を
 尋、く、又、村、上、天、皇、の、皇、子、興、平、親、と、り

十二代赤松則家安藝子居原以治取
 兼中 右大將頼朝卿孫巨目より義徳を
 揚り、い、一、時、則、宗、東、国、より、向、一、右、大、將
 家、乃、御、味、方、一、一、軍、忠、と、を、一、今、別、家
 男子二人、攻、嫡、子、は、家、能、是、は、後、院、朝
 天皇、(は、一、あり、一、次、部、入、道、忠、と、女、代、の、禮
 形、二、男、氏、乃、八、孫、父、の、一、孫、忠、宗、之、孫、也、の、
 尊、と、なり、て、其、忠、成、能、思、ふ、を、な、ま、つ、と、孫、
 之、乃、東、院、上、院、宗、重、平、郷、と、順、せ、一、也、一
 子、孫、重、平、と、孫、一、軍、配、團、扇、と、以、く、
 家、紋、と、なり、

 此、名、乃、上、院、宗、重、平、と、云、郷、名、也、一、能、合、記、は、
 武、家、士、輩、の、中、一、宗、重、平、と、云、郷、名、也、一、能、合、記、は、

晴道を彩と伝言（陸奥せんと思ひ居るも
長考、二男太郎を我秋山の方）道に入りて
己より軍中へ道もたよりありて、新谷部、
太郎をとりてとつてとつて（言天神）回道一
共八部兵居るも能くを、徳川軍、侍順
せ、ぬ回道一、沙場せ、む新九郎
席えよは此切我賞せしむ、三州南羽根
赤沢、芦村の三村と初司せしむ、
秋江御前久、左衛門尉、右衛門尉、左衛門尉、右衛門尉、
左衛門尉、右衛門尉、左衛門尉、右衛門尉、
左衛門尉、右衛門尉、左衛門尉、右衛門尉、
左衛門尉、右衛門尉、左衛門尉、右衛門尉、

秋山伯耆も敗走、寺河、南、唐檜、樹

之事

遠州の國へ下道、陸奥一、
伊豆、味方、
原、古、く、平、多、く、信、く、
神、君、八、侍、所、馬、と

進下色、越川、堀と政治、人、と堀、下、と放火
せ、山、下、付、物、う、と、い、と、も、今、年、己、又、感、言
好、く、軍、は、唯、年、春、の、事、た、か、
見、所、一、陣、と、而、せ、り、よ、く、信、取、武、田、の、將
秋山、伯耆、も、晴、道、の、傳、言、の、命、を、請、
三、州、を、切、取、け、
佐、州、より、軍、勢、と、具、一、遠、州、を、切、取、け、
む、と、二、段、通、り、白、ひ、け、り、先、久、能、の、堀、
是、一、久、能、部、の、字、能、一、一、級、川、具

佐吉へ渡来す。と勅たり。宗徳は是を
徳川家へ帰順。たる事。宗徳は、秋山へ使
を遣はし。返るもせし。返返す。伯耆も大に勝り
さ。は。是。大の見懲。よ。之。能。境。を。政。務。せ
し。と。平尾の村。陣。取。し。之。能。の。場。を
押。寄。ん。と。是。宗。徳。も。是。を。少。異。開。倒。し。と
云。知。し。少。く。出。立。致。せ。ん。と。也。
神。君。も。初。と。少。石。を。是。は。勇。平。監。病。自。疾
へ。送。り。又。菅。沼。等。百。滿。並。回。新。赤。部。自。負
等。を。援。兵。と。し。し。甚。き。を。知。り。み。欲。思。ひ。
し。り。も。大。軍。と。し。し。東。方。敵。く。よ。折。形。す。り。

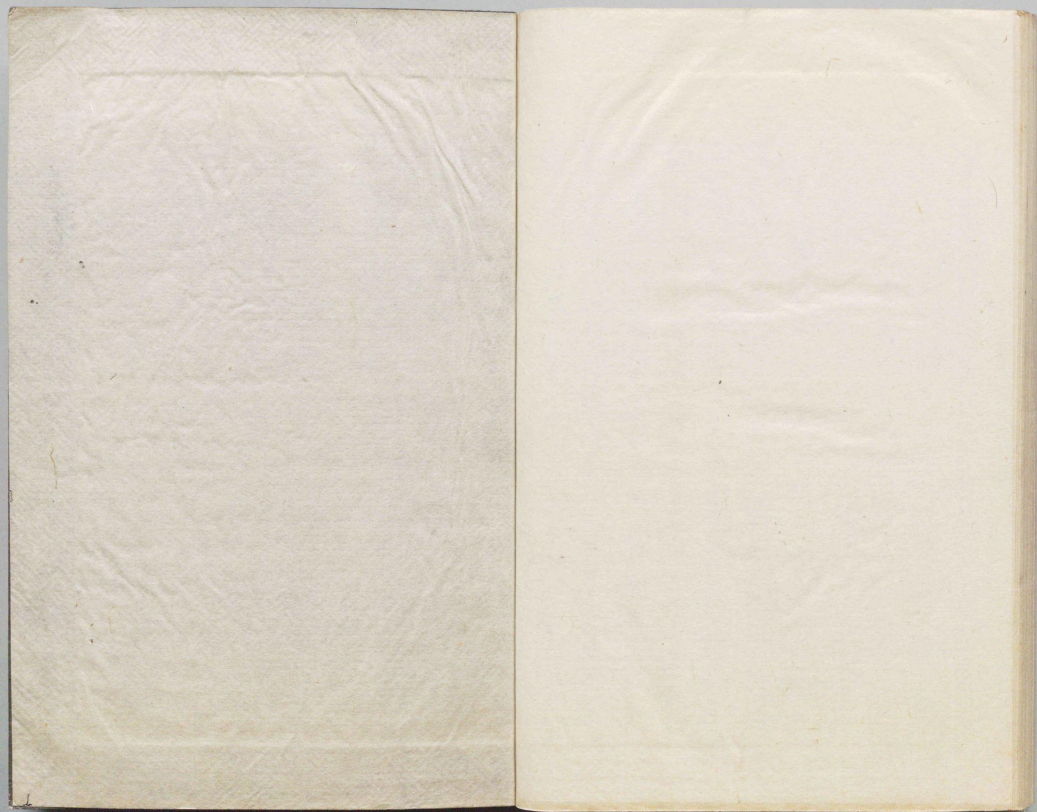
伯耆もは、後。又。宗。徳。へ。渡。来。す。と。勅。たり。宗。徳。は。是。を
徳川家へ帰順。たる事。宗徳は、秋山へ使
を遣はし。返るもせし。返返す。伯耆も大に勝り
さ。は。是。大の見懲。よ。之。能。境。を。政。務。せ
し。と。平尾の村。陣。取。し。之。能。の。場。を
押。寄。ん。と。是。宗。徳。も。是。を。少。異。開。倒。し。と
云。知。し。少。く。出。立。致。せ。ん。と。也。
神。君。も。初。と。少。石。を。是。は。勇。平。監。病。自。疾
へ。送。り。又。菅。沼。等。百。滿。並。回。新。赤。部。自。負
等。を。援。兵。と。し。し。甚。き。を。知。り。み。欲。思。ひ。
し。り。も。大。軍。と。し。し。東。方。敵。く。よ。折。形。す。り。

当固（礼入まゝや甚以て之礼略す
甚地と云らば事 延川 七段 我忠
お馬 一人も残さば首領）
以是さる 甚絲（川 續く 所馬を奪も
所勢も出て 走方と 秋心 陣 又討く
愈々んとす 形勢 城 又 川 とも 甲
々 甲 人 般を 海 公州 伴 奈 只
逃 入 け 辯 爲 勢 是 勢 一 人 也 逃 入
ま 一 と 逃 入 け せ 甲 州 地 理 乙
勢 一 なる 事 一 時 是 日 捨 穀 少 一 逃 走
たり 是 勢 方 を 違 へ 少 一 甲 州 方 也

一 秋心とは討死（き者）と名残惜けは源仲
頼（川 逃 け 甚 以 又 武 田 佐 玄 八 奇 崎 南 彦
云 者 と 度 一 一 小 州 小 田 原 一 甚 一 一 小 保
氏 康 氏 故 父 子 の 元 一 中 送 け け 六 今 川
氏 志 守 の 八 佐 守 の 甥 也 是 在 島 弱 一 一 一 一
倭 奸 の 三 浦 玄 美 佐 一 初 の み と 徳 用 一
一 族 家 人 北 道 乃 ぬ 勢 と 姓 之 古 充 善 弟
乃 者 有 然 と 合 軍 卒 田 氏 屋 路 乃 若 甚 と
乱 舞 酒 宴 一 祝 武 備 と 志 奮 する 九 幕 下
波 官 先 居 徳 川 一 由 也 一 一 遠 州 の 城 守 守
徳 川 の 為 一 攻 取 り 一 擧 一 遠 州 と 一 彼 處 の

不有と云ふん心定む他人の爲に
たんと云ふは佐吉の事なり
氏吉我道放し事
富士郡川原を統として川より東へ
くく芝原へ流るる川より西へ佐吉
不承と云ふは治山へ川より西へ佐吉
あるは親睦と云ふは又忠誠を教へ
懇勉の中送り小糸父子是を承り大に怒
古城例の形智巧云と云ふ魏元氏殿の
悪法師の油は又湘さる人も其使者の場
端は形連南宮と御捕へ榎屋は保善と
甫之居り従者有又是を兄七女甲州
傳へ云へ此は東春八氏家早く書馬
孫乃に留置せり甲州の御事一
首創へ其用多しと云へ佐吉
中中せしと云へ佐吉は従者有ハ
大に打ち戦いし早く迹去る

改正之河後風七代卷第十終



愛 知 県



1103266496